

昭和十年十二月五日印刷
昭和十年十二月十日發行

東京帝國大學學生基督教青年會



第十七號

全國高學校訪問紀念號

東京市本郷區駒込追分町五三
編輯兼發行人 永松克己
東京市淺草區永住町八九
印刷人 熊川清吉

全國高學校訪問紀念號發刊に際して

主 事 永 松 克 己

明治大正を通じて、輝かしい文化的存在であつた大學青年會が、最近に至つて、寄宿舎に立籠り、信仰生活の充實、愛の共同體の完成に専心するに至つたに就ては、色々と批評のある所であらう。

我等は何が斯る状態をもたらしたかを考へねばならぬ。今から二十年前の帝大は、文化の指導者として、自他共に許されたる存在であつた。従つて、其の中にあつて最も進取的なる學生よりなる大學青年會がその指導權を握つたことは、別に不思議なことでは無い。従つて、彼等の間から醫療機關、經濟機關の設立を見た事も亦當然の成行であつたし、此點に着眼した先輩の慧眼には、敬服せざるを得ないのである。然しながら、時勢は一變した。文化の各領域に互つて、格段の進歩と、それに伴ふ、研究範圍の分化が行はれ、文化の各分野の専門化を來し、最早半解の門外漢の發言が、文化に對して何等の貢獻をも爲し得ざるに至つた今日に於て、學生自身は勿論、社會も學生の文化運動に意義を認めなくなつた事は、誠に自然の成行である。従つて、茲に我等は文化の外に使命を求むべき立場に置かれたのである。斯る状態の下に見出された所ものが、宗教そのものへの復歸である。然しながら、我等は、文化より宗教への轉向が、しかく簡單に行はれたものではなく、其爲には約十數年の過渡期の在つたことを知らねばならぬ。大正の末期より昭和にかけての青年會の歩みの中に、我等は社會的基督教時代といふ時期のあつたことを見逃がすことが出来ない。基督教界の期待と嘲罵の交錯の内に迎へられ、間もなく解消の運命を辿つた此の運動の中に、文化運動に専心し得ず、然も何等かの新なる道を摸索しつゝあつた時潮に敏感なる青年の姿を觀取し得ないであらうか。今や我等は新に生れたのである。今秋が我等全國の高學校青年會に向つて呼掛けた所以のものも亦此處に在るのである。共に進まうではないか。

人は言ふであらう。其は單なる青年會の復古運動に過ぎない。其中には、何等の進歩的なるものが無いではないかと。正に然りである。青年會は、青年が青年に働きかけて、その魂を神に捧げしめんが爲に、祈りを以つて組織された團體である。従つて、我等の文化より宗教への復歸は、或意味に於て復古運動である。然しながら、其は單なる現實よりの逃避であらうか。想ひ見よ、現代に於て最も欠けたるものの、知識に非ずして確信なることを、人々は戰爭の理由なきことを知悉しつゝ、然も戰備に狂奔しつゝあるではないか。盲目が如何にして盲目を導き得んや。我等は、現實を正視しつゝ、神に歸らねばならぬ。現代の要求しつゝあるものは、信仰深き確信の人であり、愛に動かされて、己が身を犠牲として捧ぐる人でなければならぬ。

私は青年會の最近の歩みを、希望と喜びを以つて眺める。願はくばその歩みが、大を成さんが爲の雌伏であり、先人の教ふる所そのままを教へとする模倣に非ずして、生活を徹して、直接に神より示され、導かれ行くものであらんことを。

不安の倫理性

黃 彰 輝

荒涼たる雪の曠野に砂金を採し求めて、此處彼處と掘つては失望に吐息しつゝ、絶望もせず、倦まず求め、撓まず掘りつゞける採金者の如く、哲學する者は灼熱せる愛智の故に失敗の廢墟を乗り越へて存在の奥に秘められた意味に迫らんと藻掻きつゞける。愛に依らずんば誰かよく眞理に到りえんや。失敗こそ前進への呼掛けである。途上にある人間の不安は常に安ひへの誘惑であり、不安なき平安を彼は信じないし、忌み厭ふであらう。

現在の不安を看過し、彼方の彼方に影の理想郷を夢想するのは、眞に不安が消滅するのではなく、その逃避的肯的である。慰戯に逃避するは不安の悪しき肯定である。不安に於ける積極性を見逃す者は益々不安に落ち込むであらう。神の榮光にして同時に汚穢である人間に不安ほど貴いものにして危険なものはないか。此處にも「最も良きものは最も腐敗し易きもの」との逆理がその安常性を主張する。不安こそ逆理的である。

不安を通り一べんにしが理解し得えない者はその限り二重に蔽はれてゐる、不安そのものに、不安の意味に。不安の状態にあるもののみが安ひを約束され、不安のない安ひは逃避せる自己欺瞞である。

人間の罪の重さを未だ知らざる者。斯る者に不安を眞剣に語りえんや。「永遠の相の下」から見れば不安は落葉の音の如く、海上

の風波の如きものであらう。幸福な人々も此處で別れやう。

歴史的に見れば現在ほど不安が意識的になつた時代はない。凡ゆる分野に不安は漲り、危機が叫ばれてゐる。社會不安、思想不安、不安神學、不安哲學、不安文學。此等の新語に一種の魔術的魅力をすら感ずる。彼の中世の暗黒時代に對比して、不安時代と現代を稱んで、怪しむ人は少いであらう。しかし客觀世界に變動があつても不安はありえない。主體者としての人間そのものが不安であり危機にあるのである。

勿論不安を單に生物學的・心理學的意味に解することは勝手であり、多くはかく解して來たのである。しかし我々の問題は、かゝる存在的な不安ではなく、もつとも根源的な意味における「人間の不安」そのものである。即ち我々の問ふ不安は存在論的な意味に於ける不安である。人間が人間としてある限り常に影の如く人間を追い廻る、見えざる、脱しえざる、運命的な不安である。其は永遠の今として人間に不斷に現在し、決斷を迫る。不安は人間存在に覺存的なものである。

不安を以上の如くに限定した上で、あらためて人間存在の存在性としての不安の意味如何を問はんとするのが私の目的である。稍々ハイテツガー境に述べたが、不安の根本的把握は彼に於いて突如に現れたものでなく、宗

教的思想家が既に種々の觀點より洞察し、各自獨得の意味規定をなしてゐる。勿論かく云ふことは決してハイテツガーが此を最も哲學的に取り上げ、其の解明に努めた功績を輕視するわけではない。寧ろ從來パトリス的のみ見られ、消極的にのみ解され、ロゴス的であるべき哲學から邪魔者視され勝ちの此の概念が反つて哲學の中心問題に轉化して來た事は、彼に負ふ所決して少くない事に注意すべきである。私共は此處においても哲學は單に「學の爲の學」の閑事でないことを學ばねばならないと思ふ。

從來の思想家が如何に不安の意味理解をなして來たかを瞥見することは我々に暗示する所が多いと思ふ。故に以下少しくアウグスチヌス、パスカル、ハイテツガーの不安解釋を瞥見しやう。

神から脱落した人間、而も神から絶對的に獨立し得ない所に、又自由たらんとして自由たり得ない人間の悲劇性に、更に罪の證明と及び「驕ぶる者は汝が怒き給ふ」との證明との已に負ふてゐる所に、人間の不安の源がある。神に向けて造られた人間が、神に背いたその瞬間より、汝は常に我等に對して「否」であり、破れた人間はその現存性に於いて不安である。神と人間とが辯證法的にかち合ふ正にそれが不安である。この瞬間こそ神に對する應答であると共に、神からの類落の可能性である。此の恐ろしき不安こそ神が人間に投げつけた「否」であり、驕慢な反逆者の逃避への危機である。「神その内に在れど、彼の外のにある者、焉んぞ安ひを望みえんや。汝（神）にあつて安ふに非ずして、我が心は如何にして安定するを得んや。」アウグスチヌス

をあの盡きざる巡禮に上らしめたのも此の不安であり、彼を神につれ戻したのも、亦此の不安である。

或は又パスカルの如く無限大と無限小との兩深淵を彷徨する、常に途上にある人間に、人間不安の根源を求め得るであらう。彼にあつては、此の不安も又神を求め熱情であると共に、慰戯に身を落す可能性でもある。

或は轉じて現代の貸存哲學者ハイテツガーに於いても、深刻な不安の分析を見るであらう。彼の哲學に於いて不安が中心概念である事は周知の通りである。勿論我々は是に於いて彼の體系に深く這入らうとするものではない。只是に於いては、前二者に反して反つて彼に與し得ない點を述べて、私の確信を消極的に示す事に止めよう。不安は彼に取つては現存性の開示性を意味する。其處にあるものは開かれてそこに投出されてゐるが故に、不安である。然るに不安とは現存性の不安であり、自己自身に就いての不安である。故に不安は現存性の先驅性を指示する。即ち現存性は既存在のみでなく、常に可能的存在としてあるが故に、不安である。不安とは自己の可能性に就いての（窮極的には自己の死に就いて）不安である。我々は是で注意を要する事は、ハイテツガーに於いては、不安は常に自己の不安としてのみ取扱はれる。即ち彼の出發點となつた現存性は、飽く迄個人である。此の事は、次の事で一層明瞭に伺はれると思ふ。彼に於いては他人と共にある普通の人間を單なる人と稱し、之は本來的自己から類落した、我でもない彼でもない即ち一切の人でない、而も一切の人である非本來的自己である。我々は普通斯かる類なる人としてゐる。

が當である。故に不安は開示性として自己の可能的存在を開示し、かゝる非本來的自己を本來的自己に連れ戻すのである。不安が單なる消極的概念にのみ用ひられずして、何らかの意味で積極性を帯びてゐる事に我々は注意すべきであると共に、彼の云ふ不安とは飽く迄自己内の不安である事を見逃してはならぬ。然し之は寧ろ彼の出發點たる現存在に於て既に規定されたものである。世にあるものとしての現存在は又自己に關心を持つものとして、各自性と謂ふ根本規定を擔ふものである。否此の兩規定は覺存と超越との他の二つの規定とを合せて現存在の形式的全體規定であると同時に、之等は決して夫々別々のものでなく同一構造を異つた視角から云ひ表はしたものである。故にその何れをも缺くことは不可であると共に、その一つから必然的に他に移るものである。

以上で假令ハイテッカーが繰返して現存在はその存在性に於て借存だと述べて見てもそれは飽迄個人に立つての立言で、個人主義も何らかの意味で社會觀を有し又有した限り、此の主張は彼の個人主義的色彩を消すものではないであらう。若し之に誤りなかりせば、我々は當然次の二つの疑問を提出し得ると思ふ。先づ不安は個人即ち我のみの不安であらうか。次に假令不安が個人的であると譲歩しても、斯くの如き意味に解された不安は眞に不安と云ひ得るであらうか。蓋し本來的自己も、非本來的自己も、自己である限り、兩者は差違こそあれ、矛盾は有り得ないでばなからうか。分裂の無い、矛盾の無い不安は未だ眞の不安であり得ないではなからうか。超越的連続のある所にのみ、不安が眞に不安と

して云はれ得るのでなからうか。約言すれば量の相違に於ては未だ眞の不安は云ふを得ず、質の相違に於て始めて覺存的に解された不安が有り得るのでなからうか。

斯くして我々は今一度飄つて、不安の根底を檢證し、その意味に迫るべきである。先づ我々は日常的な事から出發しよう。普通我々が不安なる言葉を使用する場合には、常に何々に就て不安だ、或は何々に對して不安だと言ふ。即ち單なる不安と云ふ事は意味の無いことである、假令何となく不安だと云はれる場合でも、それは單なる心情性に解されることは許されない。此の場合にも矢張り何々に就て、何々に對して云はれるものであり、只その向ふにあるものが朦朧として蔽はれ、一種の氣味悪さを帯びて來るに過ぎない。何となくと云ふのは、此の朦朧的性格を云ひ表はしたもので、決して單なる心情性を意味するものでない。故に不安は對を絶して、それ自身にあり得るものでなく、常に相互に向ひ合ふ時にのみあり得る。不安を單に個人的に於てのみ、解され得ない理由の一端も茲にある之を不安の相對性と假に呼んでおかう。然し不安と恐怖とは混同すべきでない。前者は對人關係であり、後者は對物關係である。地震洪水野獸に對するのは、不安でなく恐怖であり、不安とは人格的にのみ使はれる。勿論兩者の間に連關が無いとは思はれない。即ち自然現象に依て惹起されか恐怖が、それを媒介として人間に對する時に恐怖は不安になつて來る。地震に對する恐怖が、若しそれを媒介として知人に向げられる時、それはもはや恐怖でなくして不安である。故に相互に對立すると云つても人對人との關係に於いてのみ

不安と云はれ得る。故に我々は斯く云ふ事が出来る。我と汝との對立的相に於てのみ不安は現實的となり、逆に云へば不安は人倫觀を地盤に持つ時にのみ可能である。我と汝との地盤を離れた不安は抽象的ではあり得ない。勿論その他者はそれ自らの存在を確示するとは限らない。他者の所有物を盗んだ人は、物の故に不安でなく、自己の爲に不安でも無く、一見蔽はれてゐる他者の爲に不安である。然し茲に考慮すべき有力な反對が個人主義の側から提出され得る様に思はれる。即ち死の個人性である。人間は常に可能的存在として死を擔ひ、先驅的にそれを了知してゐる。死は最後のなものであり、絶対に逃避し得ない自己の引受けなければならぬ運命である。我々は一時的に死を忘却し得るであらう。或はその人を愛する母や友人が一時彼の代りに死ぬる事もあらう。然しそれは飽迄一時的であり、いつか自己で味はればならぬ筈である。人は獨り死に行かればならぬ。とパスカルは云つた。死、之こそ個人から凡ゆるものを奪ふても殘る唯一の破れない堡壘の如きものである。而も死こそ不安の不安である。人若し死なすば、假令倦怠があつても不安は有り得ない。成程之は個人主義の側に於ける最も強い武器であり、之に答へ得ぬ場合には、相對性に於て見られた不安は無意味であらねばならない。

成程客觀的自然的に見れば、死は特定の個人の死である。然し自然現象と見られた死はその限り自然的諸現象と何ら異なる所は無い。自然現象に於ては變化こそあれ、本來的意味に於ける死はあり得ない。自然現象的に見られた死は抽象的な死であつて、具體的な死で有り得ない。客觀的に森羅萬象の移り變りを

見れば、我々の死は、主體的に死に就くものと、間に現實的相違がある。自然的死は具體的人間存在の先驅的に了知し得るもので無い。否、かゝる死は、それが客觀的に眺められた限り變化であり、從つて不安ではあり得ない。若し我の死が自然的な死でなく、而も人間の不安の不安として云はれ得るならば、その我とは一體何を意味するか。自己同一的な我に於ては、差違こそあれ、矛盾のあり得る筈はない。而も矛盾を離れては不安は有り得ない。然らば死が不安の不安として自覺される場合を我々は考察して見よう。

我が我として他に負ふてゐる時、我の死は不安となるので無からうか。子を持つた母よりも子を持つ母が、より死に職くではなからうか。飽迄も我が我でありながら他に負ふて居り、他を離れて我はあり得ない時、而も我は我である時に、その死が不安の不安として開示される。死も我と汝との相對性に於て初めて現實的に不安なり得る。然しその根底には我にも非ず、汝でもあらざる絕對他者に我は縛られ、死を介して絕對他者に對する故に、又此の死は罪の證明として問はれ、その反逆の證示として戮かれる故に、死は不安であるのである。故に死の不安は絕對他者のナインに於て立たされる時、戮かれるものとして、他者に對する時に不安である。故に死は個人的なもので無く、一方同じく死を擔ふ他者に對する故に、他方絕對他者に對する故に不安の不安であり得るのである。前者は不安の倫理性を、後者は不安の宗教性を指示し、而も前者はその根源を後者に負ふものと云はれるべきである。

會員動靜

本年度卒業生

三輪和敏兄(文、教育) 帝大Y.M.C.A.日曜學校の軍鎮として、生徒に最も人望あり、又青年會劇團の名優の同兄は卒業と、ともに從來關係のあつた江東方面傳道に隠れもなき光の友社に入り、虚弱兒童保育塾の設立に多忙の由困難な事業の上に神の御祝福を祈ります。

本所區菊川町二ノ二 光ノ友社

眞鍋 豊兄(文、英文) 將來は宗教々育を以つて立たうとかねて言明してゐた同兄は今春卒業と同時に三井社員の子弟の爲の學寮三友學舎の舎監として青年諸君の生活の指導に當られることになりました。

麻布區斧町一四六 三井三友學舎

黄 彰輝兄(文、哲學) 青年會隨一の哲學者として輝かしい存在であつた同兄は卒業と共に英國留學の好運を獲得、舍生一同の羨望を一身に集めて四月鹿島立。

臺灣大甲郡大肚在大肚 三七〇

平井満喜男兄(文、英文) 美文と美聲の主として舎の内外に名高かつた同兄の卒業退舎は一抹の淋しさを覚えしめるが、大學院に在籍、晝食は必ず舎の食堂に徴兵検査第二種合格の元氣な坊主頭を出されるので一同喜んだこと……

澁谷區代々木富ヶ谷一四六六武田方

田中美輝夫兄(文、英文) 舎内では彦左衛門

格の同兄も山口中學校に赴任。

山口市後河原町一五五 安富部屋

石川正義兄(經、經濟) 經友會委員、新劇研究家として舎外に名高かつた同兄も多難な經濟界に學究的進路を求めらるゝ由。

勤務先 第一銀行内龍門社

本郷區駒込神明町三二五 杉山方

竹本 清兄(工、應化) 舎の經濟的更生と日曜學校事業に格別功勞のあつた同兄も芽出度く三菱石油川崎工場に就職。

横濱市鶴見區東寺尾町一七一八 廣井方

角田資敏兄(工、鑛冶) 歌人、本學水泳部の軍鎮、三輪兄とともに青年會劇團の名優、合唱團にも無くてならぬ名テナー、多才の同兄も東北の山の中に歌人の心境を樂しまれるとか。

勤務先 藤田組、小坂鑛山冶金課

私田縣鹿角郡小坂町 松本旅館

中野俊賢兄(農、農士) 青年會のアルビノストも雪懐の顔を輝かしつゝ渡臺。

勤務先 臺灣總督府殖産局

臺北市古亭町二五〇

先 輩

原田 健氏(大七、法) 目下賜暇歸朝中のゼ

ネバ國際聯盟事務局の同氏は獨身主義外交官として名高かつた(？)が、最近流行の

心境の變化により五月圓滿に御結婚、京都に卜居せられました。謹んで御慶び申し上げます。

阿部太郎氏(昭九、工) 大學卒業後長く客間

に滞在中の同氏は此の程日本曹達株式會社に入社新潟縣二本木町の同工場設計部に赴任。

石賀 修氏(昭七、文) 永らく當地にて病氣

療養中の同氏は九州へ赴かれ引續き保養に専心の由、御全快の日の早からんことを祈ります。

福岡市平尾淨水池下八九六

石倉一郎(昭八、經) 外務省東亞局第一課在勤の同氏は此程御結婚の由、謹んで御祝ひ申し上げます。

下谷區茅町二ノ三〇

符川 浩氏(昭十一、文) 大學院在學の同氏は外務省、史料編纂部に御就職の由。

今川義利氏(大六、法) 横濱正金の同氏は先

般同銀行印度カルカッタ支店に御轉勤の由。

上村哲彌氏(大八、法) 滿洲國官吏であつた

同氏は滿鐵入社、總裁室福祉課長に御就任。

小柳義雄氏(大一一、醫) 暫らく音信不通の

同氏は諸橋氏と改姓、富山市赤十字病小兒科部長として御健在の由。

林 忠美氏(明四一、法) 京橋區長の同氏は

昨年電氣局理事として古巣に戻られ、市電ストライキ、帝都交通統制委員會と敏腕を振つて居らるゝ模様。

原田以和夫氏(昭四、經) 川崎造船所本社へ

御轉勤、神戸市灘區琵琶町一丁目四に在住。

平川信弘氏(昭十、文) 本年一月芽出度く除

隊の同氏は廣島陸軍幼年學校教官に就任。

廣島市中田町早稻田一〇二六龜高氏方止宿

地方在住會員諸氏

御上京の際は是非青年會を御訪れ下さる様に希望いたします。